

ととかま 作 本田実和 (無断使用はお断りしております。お問い合わせは [www.peketv.com](http://www.peketv.com) まで)

ファイナンシャルプランナーの亜希には、気になるクライアントがいる。あれは梅雨のさ中6月の土曜日の昼下がり。その相談者は彼女が営むFP事務所を訪れたのだった。あけぼの商店街のはずれにある「おさいふカフェ」には、様々な年代の人々がお金にまつわる相談に訪れる。1Fがオーガニックカフェ。2Fが相談所の構えは訪れる人も気楽に心のうちをのぞかせる。商店街で買い物をすませ、カフェで一息ついた後ついでにお金の相談にやってくるクライアントが殆どだ。

けれど、あのクライアントは少し違っていた。50代男性。このあたりでは見ない顔。所在なげに「こんなものしか用意できなくてすみません。」と照れながら「ととかま」と書かれた笹かまぼこの包みを無造作に差し出した。これは確か、伊勢行き特急・しまかぜのビュッフェで購入したお土産。そんな遠方からわざわざ訪れた男性客を亜希はまじまじと見つめた。

「いえ、お気遣いなく。何か私でお力になれることがありますか。」

窓の外の雨は一段と激しくなったようだ。

聞けば男性は、これまで30年勤めた会社で所属を異動し、営業畑から庶務に担当替えされたという。ただそれだけのことが、彼の生活を一変した。これまで当たり前のように顧客と話し自社の商品を販売する仕事に誇りをもっていたから、庶務課で伝票整理をする単調な日々がたまらなく空しくなった。こんなはずじゃなかった。自分にはもっとやりたいことがあったはずだ。矢も楯もいられぬ思いを抱えて、仕事を休んで毎日カラオケボックスに通った。十八番(ハコ)のバラードを熱唱する瞬間だけが今の彼のストレス解消だという。しかし、問題はそのことを全く家族に話ができずにいることだ。長年連れ添った妻に不服があるわけではない。中学生の二人の子供も明るく元気に育ってくれている。それなのに、今の自分を正直にさらけ出せないでいることに苦しんでいた。そしてその苦しみが、毎月のお小遣いを使い果たし夫婦で大切に貯めてきた貯金にまで内緒で手を出すようになっていた。使い途は「カラオケ」なんて今さらとても言えない。言えるはずがない。クライアントは大きなため息をついた。「とにかくご家族にこころのうちをお話してみませんか。色々な情報を見える化することでしか、ご家庭のおさいふ事情は解決できませんから」そんな風に亜希はアドバイスをしたのだった。

あれから半年。あけぼの商店街の銀杏並木が艶やかな黄金色に染まった晩秋のある日、その知らせはあった。第一声があまりにも明るい声だったから、亜希は最初電話の相手が分からずにいた。

「先生、ご無沙汰しております。」

「ああ、あの…ととかまの？」

「そう、そうです。ととかまのおっさんです。」「その節はお世話になりました。お陰で…」

あれから、勇気を出して妻にあらいざらい相談したこと。その妻に叱られ支えられ、やがて家族でカラオケを楽しむようになったこと。妻や子供たちは男性の歌をいつもほめてリクエストしてくれたこと。そんな日々が、彼の生活を明るいものに変えたという。その結果、ただやみくもに貯金するだけではなく、家族で楽しむお金の使い途が生まれた。

「実は…つい最近、テレビのど自慢大会に出場して、グランプリとっちゃったんですね。だから、絶対先生に連絡しようって。今度、妻と一緒に相談に伺いますから、よろしくお願いします。」

亜希は、なぜか捨てられずにいた「ととかま」の包み紙をぎゅっとにぎりしめると、思わず笑顔がこぼれた。